

「釧路湿原自然再生協議会」

第 4 回 湿原再生小委員会

資 料

平成20年3月3日

釧路湿原自然再生協議会運営事務局

釧路湿原自然再生協議会

－ 第 4 回 「湿原再生小委員会」 －

日時：平成 20 年 3 月 3 日（月） 13：30～15：30

場所：釧路市交流プラザさいわい 6 階 大会議室

議 事 次 第

1. 開 会
2. 第 3 期湿原再生小委員会の委員長及び委員長代理の選出
3. 議 事
 - 1) 幌呂地区の変遷と現状
 - 2) 幌呂地区で生じた現象と課題
 - 3) 幌呂地区の湿原再生目標の設定
 - 4) 広里地区の湿原再生
4. その他
5. 閉 会

釧路湿原自然再生協議会
湿原再生小委員会 委員名簿

計：41名

■個人(20名)

(敬称略、五十音順)

No	氏名	所属
1	桂川 雅信	北海道教育大学札幌校 非常勤講師 環境カウンセラー(市民部門)
2	金子 正美	酪農学園大学 環境システム学部 地域環境学科 教授
3	亀山 哲	国立環境研究所 流域圏環境管理研究プロジェクト 主任研究員
4	神田 房行	北海道教育大学 釧路校 教授
5	神戸 忠勝	
6	木村 勲	
7	清水 信彦	
8	新庄 久志	釧路市環境政策課 主幹
9	仲川 泰則	
10	中村 隆俊	東京農業大学 生物産業学部 講師
11	中村 太士	北海道大学大学院 農学研究院 教授
12	西川 潮	独立行政法人 国立環境研究所 環境リスク研究センター
13	西村 旬司	釧路湿原川レンジャー
14	橋本 正雄	日本野鳥の会釧路支部 副支部長
15	宮尾 素子	
16	松本 文雄	
17	矢崎 友嗣	
18	矢部 和夫	
19	山内 昴	環境カウンセラー(事業者部門)
20	山田 浩之	北海道大学大学院農学研究院 助教 環境資源学専攻 地域環境学講座 農林環境情報学分野

■団体(13名)

(敬称略、五十音順)

No	団体/機関名	代表者名
1	釧路自然保護協会	会長 高山 末吉
2	釧路生物談話会	代表 須摩 靖彦
3	さっぽろ自然調査館	代表 渡辺 修
4	NPO法人タンチョウ保護研究グループ	代表 百瀬 邦和
5	鶴居排水路維持管理組合	組合長 瀬川 勝巳
6	塘路ネイチャーセンター	センター長 鷺見 祐将
7	特定非営利活動法人 EnVision環境保全事務所	理事長 金子 正美
8	特定非営利活動法人 釧路湿原やちの会	理事長 杉山 伸一
9	特定非営利活動法人 トラストサルン釧路	理事長 黒沢 信道
10	北海道標茶高等学校	校長 小川 龍幸
11	北海道プロフェッショナル フィッシングガイド協会	会長 テディ 齋藤
12	ボランティアネットワークチャレンジ隊	代表 佐竹 直子
※ 13	山崎山林森林セラピー推進会	会長 山崎 正明

■オブザーバー(3団体)

(敬称略)

No	団体/機関名	代表者名
1	標茶町農業協同組合	代表理事組合長 高取 剛
2	釧路丹頂農業協同組合	代表理事組合長 植田 晃雄
3	鶴居村商工会	会長 大津 泰則

■関係行政機関(5機関)

(敬称略)

No	団体/機関名	代表者名
1	国土交通省 北海道開発局 釧路開発建設部	部長 上西 隆広
2	環境省 釧路自然環境事務所	所長 北沢 克巳
3	釧路市	市長 伊東 良孝
4	釧路町	町長 佐藤 廣高
5	鶴居村	村長 日野浦 正志

※第3期(後期)新規構成員

項目	発言概要	回答および今後の検討方針（案）	備考
湿原の面積及び釧路湿原全域の動植物調査の概要について	<ul style="list-style-type: none"> 阿寒川流域などには広大な湿原が残されている。過去の釧路湿原の面積や範囲を当委員会で明確にしていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 「釧路湿原自然再生全体構想」の「第3章 自然再生の対象となる区域」を前提として、1980年代の釧路湿原の状況を考慮して自然再生の具体的な対象区域を検討している。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 仁々志別川の西側（北斗地区）でキタサンショウウオが釧路湿原で最初に発見された。現在の対象区域図ではこの地区は釧路湿原でないという判断になってしまう。釧路湿原の範囲の設定には配慮が必要である。 		
	<ul style="list-style-type: none"> 過去の湿原面積を把握する際には起点を設ける必要がある。まずは昭和22年以降の航空写真から調査してはどうか。 	<ul style="list-style-type: none"> これまでに、昭和22年以降の航空写真を判読し、釧路湿原の植生の変遷について調査を行っている。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 関係者で議論し、湿原範囲の考え方をできる限り早いタイミングで明確に示すことが大事である。 湿原の範囲は“分かりやすさ”にも配慮して線を引かざるを得ない場合もあると思う。その場合、対象エリアから外れる湿原も出てくると思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 1980年代の釧路湿原の状況を踏まえ、釧路湿原の範囲とその面積について必要に応じて今後も継続して検討を行っていく。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 湿原面積の基準はワーキング形式で1年かけて検討し、委員会としての公式見解を示すべき。 		
	<ul style="list-style-type: none"> 湿原範囲を設定する際には既存の植生図とも整合を図る必要がある。 		
	<ul style="list-style-type: none"> 北斗地区に残された草地にはキタサンショウウオの他、日本では滅多に見られないミズクモが確認されている。このような連続していない重要な飛び地も釧路湿原として面積に加えるべきである。 		
	<ul style="list-style-type: none"> 武佐の湿原も地形的に捉えると湿原面積に入って当然である。流域としての面積や、あるいは土地利用されているところを除いた面積など単純化した方がよい。 		

第3回湿原再生小委員会の発言概要と今後の検討方針（案）

(2/4)

項目	発言概要	回答および今後の検討方針（案）	備考
広里地区の湿原再生について	<ul style="list-style-type: none"> 伐採試験区と非伐採区におけるヨシの乾物重量は、非伐採区の方が多いという結果が理解できない。伐採しなければ日陰が多くなるので乾物量は少なくなると考えられると思う。 	<ul style="list-style-type: none"> モニタリングを継続中である。今後も継続して検討を行っていく。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 生育する時期と調査実施日も関係している可能性がある。ムジナスゲは春先、ヨシは7月、8月に成長するので、伐採直後はムジナスゲが優先する結果になっているのでは。 	<ul style="list-style-type: none"> 毎年8月下旬に調査を実施している。モニタリング継続中であり、今後も継続して検討を行っていく。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 伐採区でムジナスゲの乾物量が大きくなっている。調査担当者の解釈は、伐採区でムジナスゲが大きく成長したことが、ヨシの生長を抑制しているということであったが、原因を特定するには詳細な調査が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> モニタリングを継続中である。今後も継続して検討を行っていく。 	

第3回湿原再生小委員会の発言概要と今後の検討方針（案）

(3/4)

項目	発言概要	回答および今後の検討方針（案）	備考
幌呂地区の湿原再生について	<ul style="list-style-type: none"> 自然再生事業のゴールは生物多様性の問題解決であると思う。幌呂地区について言えば、排水路とハンノキの問題など原因と結果の関係がわかりにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> 幌呂地区の現状を把握し、過去の開発行為とその後の変化を対比するなどして、原因と結果の関係の把握に努める。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ハンノキ林の成立要因が栄養塩なのか水位なのか収斂させていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 栄養塩に関する調査は進んでいないが、地下水位と植生の関係について分析し、その結果を踏まえて必要に応じて栄養塩に関する調査・検討を行い、ハンノキ林の成立要因の把握に努める。 調査・検討にあたっては、既往の調査・研究事例を参考にするとともに、関係機関の連携を図る。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 図を見ると沢に沿ってハンノキ林が拡大している。地下水や地表水が丘陵地の農地から湿原内に流入する区域でハンノキ林が拡大しているケース（風連湿原）があるので、このような視点も踏まえ検討願いたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 地下水および地表水に着目し、工学的手法により現状と過去の再現を行い、その結果と植生の変化状況を対比するなどして分析を行っていく。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ハンノキ林の増加や土砂流入の観点で見ると、雪裡川地区の方が重要だと思う。今後検討を行う考えを持っているのか。 	<ul style="list-style-type: none"> 現時点では調査は進んでいないが、将来的には土砂流入対策、湿原植生の制御という観点で取り組みを考えたい。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 再生手法として“丘陵地への植林”は慎重に検討すべきである。特に湧水環境は非常にデリケートであり、現状で問題がないのであれば放っておくべき。 	<ul style="list-style-type: none"> 事業の実施内容について具体的に検討を行う際、湧水環境にも配慮する。 	

第3回湿原再生小委員会の発言概要と今後の検討方針（案）

(4/4)

項目	発言概要	回答および今後の検討方針（案）	備考
関連する農業整備事業について	<ul style="list-style-type: none"> 雪裡川沿いの掘削残土を撤去して氾濫させる農地は、今後、農地防災事業を実施しないことになるが、この場所は将来どうするのか。 	<ul style="list-style-type: none"> 農地防災事業からの除外地において、河川沿いの掘削残土を撤去するという事で検討を進めている。その土地は、将来も農地として利用の見通しがないと地元から聞いている。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 排水路の近自然型護岸は、排水の機能はもとより、エコトーンとしての考え方を取り入れるべきである。 	<ul style="list-style-type: none"> ご意見を踏まえて検討していく。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 当該地区の現状が把握しやすいように、2万5千分の1程度の縮尺で作成した図面を提供願いたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 第4回湿原再生小委員会において、計画について説明する。 	
雪裡樋門地区について	<ul style="list-style-type: none"> ヤナギタデが優占するような群落は湿原には存在しないので、この結果から湿原群落が回復したとは言えない。 	<ul style="list-style-type: none"> その後の調査により、ヤナギタデに変わり、ツルスゲ、ムジナスゲ、ヒメシダ、ミズオトギリなどの湿生植物の割合が増加したことを確認した。今後も、必要に応じてモニタリングを継続していく。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 試験湛水の終了後にハンノキが再生される状況が見られる。ハンノキ調査は今後も継続的に実施すべきである。 	<ul style="list-style-type: none"> ハンノキ調査については、今後も継続的に実施していくことを検討する。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 右岸堤の堤内地の土地利用計画がないのであれば、ここを自然再生的に利用することを釧路川整備計画の中で議論してもよいのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後、現状の課題を整理し、必要に応じて検討していく。 	

第4回 湿原再生小委員会

資料目次

	頁
はじめに 第1回～第3回湿原再生小委員会の議題と内容について	1
1. 幌呂地区の変遷と現状	4
1-1. 幌呂地区の歴史	4
1-2. 幌呂地区の変遷	7
1-3. 幌呂地区の現状	8
2. 幌呂地区で生じた現象と課題	9
2-1. 幌呂地区で生じた現象と課題の関係	9
2-2. 幌呂地区で生じた現象	10
2-3. 幌呂地区の課題	12
3. 幌呂地区の湿原再生目標の設定	14
3-1. 幌呂地区湿原再生区域の現状分析	15
3-2. 幌呂地区のリファレンスサイトの設定	16
3-3. 湿原再生区域とリファレンスサイトの現状	16
3-4. 幌呂地区の湿原再生目標の設定	19
3-5. 湿原再生区域隣接地での農地防災事業計画について	21
4. 広里地区の湿原再生	22
4-1. これまでの経緯と検討項目	22
4-2. 隣接河川の堰上げ検討	23
4-3. 地盤掘り下げ試験	24
4-4. ハンノキ伐採試験	26